

# 埼玉古墳群内に所在する石塔群

栗岡真理子

## はじめに

埼玉古墳群は令和2年3月、埼玉県で初となる特別史跡に指定された。我が国の古墳時代を代表する史跡の埼玉古墳群であるが、古墳時代以降のこととして有名なのは、石田三成による忍城水攻めであろうか。本稿では丸墓山頂上に旧在していた石塔群を中心に取り上げ、江戸時代の埼玉古墳群の姿について考えてみたい。なお、今回は埼玉古墳群内に分布する3つの石塔群を取り上げ、便宜的に石塔群1、2、3と番号を付した。

## 1 丸墓山古墳西側所在石塔(石塔群1)(表1 写真1～25)

石塔群1は丸墓山古墳西側に並ぶ7基の石塔であり、向かって左側から石塔1、石塔2……と番号を付した(写真2)。これらの石塔は、昭和60年に実施した丸墓山古墳保存整備事業により、墳頂から現在地に移設したものである(写真1)。写真1を見ると、石塔4と5の位置が入れ替わっていることが分かるが、その他は現在の並びと同じであり、昔は墳丘頂上の北西側に南東方向を向けて立てられていたことが分かる。

### ・石塔1(写真5、6、14～16)

延宝元年(1673)銘の墓標である。石塔の形は笠付方形。笠には破風の表現が見られ、笠の上の宝珠を欠く。方形の枠内には梵字(アーンク)と胎藏界大日如来坐像、その下に銘文を刻む。銘文は「延宝元癸丑天／岸海上人／七月二日」。方形の側面には蓮華文が陽刻され、反花座を伴う。現存高は147cm。

### ・石塔2(写真7、17、18)

寛文7年(1667)銘の庚申塔である。石塔の形は尖頂舟形。枠内に梵字で金剛界大日如来(バン)を表し、さらに梵字で金剛界四仏(ウーン、タラク、キリーク、アク)を刻む。銘文は「寛文七丁未年／九月十八日」、銘文の下に三猿(みざる・いわざる・きかざる)と二鶏を浮彫する。下の区画には庚申講を組織する人名が刻まれる。管見の限りであるが江戸時代の庚申塔としては行田市内2番目に古い紀年銘を持つ(行田市 1964)。全高は130cm。

### ・石塔3(写真8、19、20)

天和3年(1683)銘の墓標である。石塔の形は笠等を欠くが、形状から笠付方形と思われる。方形の枠内には梵字(アーンク)と胎藏界大日如来坐像、その下に銘文が刻まれる。銘文は「天和癸亥三曆／権大僧都尊海上人／二月二十六日」で、枠に「孝弟」、「典能」の文字が刻まれる。方形の側面には蓮華文が陽刻される。方形の高さ92cm。

### ・石塔4(写真9、21、23)

宝永5年(1708)銘の墓標である。石塔の形は尖頂舟形。三角の頂部には破風の表現が見られ、枠内には下側に陽刻された蓮華文から延びる蓮台に胎藏界大日如来坐像を表現される。像容を挟み「権僧都林(悦)万海」「宝永五(戊)(子)天正月四日」の銘文を刻む。高さ99cm。

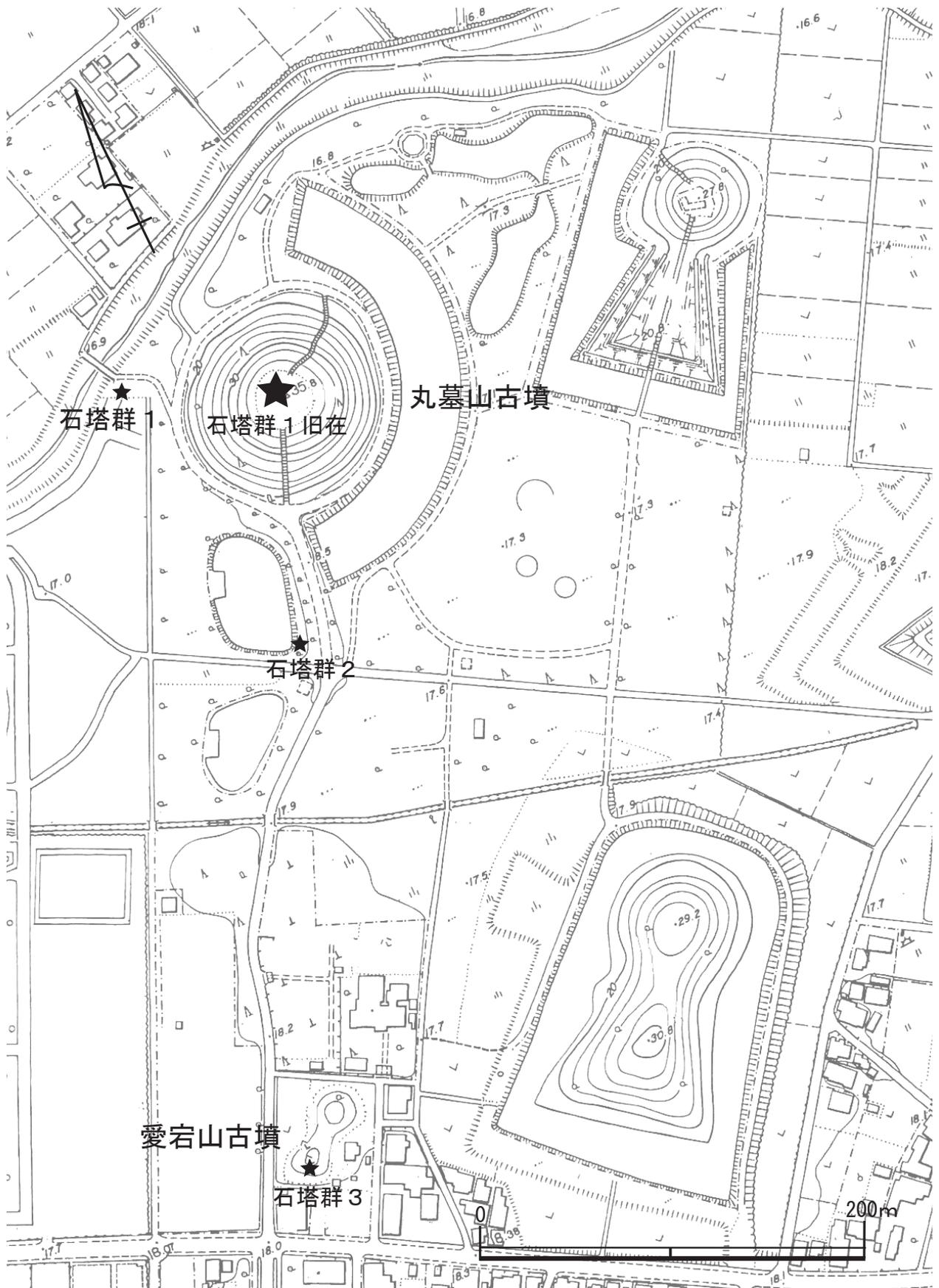


图1 位置图

・石塔5(写真10、22)

天和3年(1663)銘の墓標である。石塔の形は舟形仏像。梵字(ア)と胎蔵界大日如来坐像を陽刻し、像容を挟み「天和三(癸)(亥)年／道清」八月十八日」と刻む。高さ52cm。

・石塔6(写真11)

元禄7年(1694)銘の墓標である。石塔の形は尖頂舟形。枠内には梵字(ア)(胎蔵界大日如来)と「元禄七甲戌 施主／林海行人 □□／六月廿九日 敬白」と刻む。高さ63cm。

・石塔7(写真12、13、24)

明暦3年(1657)銘の地蔵である。石塔の形は舟形仏像。中央に地蔵菩薩立像を陽刻し、像容の両側には「夫地蔵菩薩者聞錫杖聲速得[ ]／明暦三天／正月廿四日／奉造宮當□□六道四生出離生死則[ ]」と刻む。地蔵菩薩は蓮台の上に立ち、右手には錫杖を持つが杖の部分は欠失している。左手先を欠失していることから、印相は不明である。毎月24日には地蔵講が行われたとされ、講を組織する人々による造塔と考えられる。高さは150cm。

## 2 丸墓山古墳南側所在石塔(石塔群2)(表2、写真26～30)

石塔群2は丸墓山古墳南側のさきたま風土記の丘案内板の足元に立つ(写真26)。この石塔については、いつ、どこからこの場所に来たのか、来歴をたどることができなかった。

・石塔8(写真27)

貞享元年(1684)銘の墓標である。石塔の形は尖頂舟形。枠内に「帰真」十二月十四日／劍空道智信士靈位／貞享元甲子天」の銘文を刻み、枠外には陽刻の蓮葉を施す。高さ70cm。

・石塔9(写真28右側)

無銘の無縫塔である。塔身の下半部と基礎を欠失しており、時期については不明である。

・石塔10(写真28左側)

無法塔である。塔身に「當山十三世亮岩周察覚□塔」と刻む。台座は確認できない。年号がないことから時期を特定できない。塔身の高さは40cm。

・石塔11(写真29)

寛文元年(1661)銘の墓標。石塔の形は尖頂舟形。枠内に梵字(ア)(胎蔵界大日如来)、「寛文元年／林宥法師／辛丑八月十八日」、枠外に「若子[ ]」「施主宗覚」と刻む。高さ55cm。

・石塔12(写真30)

明治27年(1894)銘の馬頭観音である。石塔の形は駒形。中央に「馬頭観世音」、右側に「明治廿七年旧五月八日」、左側に「大字若小玉／願主 金子金吉」と刻む。今回調べた石塔群の中で唯一、明治期の石塔である。高さ73cm。

## 3 愛宕山古墳墳丘所在石塔(石塔群3)(表3、写真31～39)

愛宕山古墳前方部南側の墳頂近くに3基の石塔が立つ(写真31、39)。この石塔群が、いつからこの場所にあるのかについては、来歴をたどることはできず、不明である。

・石塔13(写真32、35)

延宝4年(1676)銘の墓標である。石塔の形は一部上部を欠損するが、舟形仏像。中央に地蔵菩薩立像を浮彫し、像容を挟んで「帰真 宗林禪定門 靈」延宝四年丙辰九月九日」と刻む。地

蔵菩薩は蓮台の上に立ち、顔は欠損するが、他は残りがよく、胸の前で合掌する。

・石塔14(写真33)

延宝2年(1674)及び貞享元年(1684)の2つの紀年銘を持つ墓標である。石塔の形は双尖頂舟形。尖頂舟形石塔の双碑形であるが、中央を未蓮華で区切る。右側には「帰真 延宝(二)甲(寅)年／法圓 靈／六月十八日」、左側には「帰真 貞享元甲子年／妙智 靈／八月十九日」、枠の右側に「施主」、左側に「白石口兵衛」の銘が刻まれる。夫婦の墓標と考えられる。

・石塔15(写真34、36)

寛文年間(1661～1673)の墓標である。石塔の形は舟形仏像。中央に「寂」の文字と阿弥陀如来立像を陽刻する。阿弥陀如来立像は蓮台の上に立つ。像容の右側には「(上)空宗圓禪定門靈位寛文[ ]年／□月十八日」、左側には「[ ]禪定[ ]／三月[ ]」の銘が刻まれる。表面の摩滅が著しく、判読できない箇所が多かったが、「禪定門」と「禪定尼」の2名の法名が刻まれると考えられ、夫婦の墓標の可能性が高い。

## まとめ

『新編武蔵風土記稿』や『増補忍名所図会』等の江戸時代の記録によると、丸墓山古墳の麓に西行寺と呼ばれる寺があったことが分かる。西行寺は国王山地蔵院と号し、天台宗東叡山の末で、元は出羽国羽黒山寶前院の末とされる。本尊は延命寺地蔵像である。なお、近くの安楽寺には明治5年(1872)の西行寺廃寺の際にあずかると伝わる子育て地蔵が残る。西行寺の北側には丸墓山古墳があり、頂上には大日堂(『湯本家文書』では十王堂)が建つと記される。

石塔群1がいつ頃から丸墓山古墳頂上にあったのかは分からないが、堂があったことからすると、石塔も当初から頂上に建っていた可能性が高いと考える。また『湯本家文書』では西行寺とともに墳頂の大日堂(十王堂)が描かれており、その位置関係からしても墳頂の堂と石塔群はともに西行寺に関係するものと考えられる。

石塔群1のうち4基は僧侶の墓石である。江戸時代の墓石は封建制度を反映し、墓石の大きさには経済的要因が顕著に表れるとされる。特に、笠付方形塔は限定された階層が使う墓石とされている(立正大学 2015)。石塔群1の僧侶の墓を年号順にすると、石塔1－石塔3－石塔6－石塔4となり、石塔1と石塔3は笠付方形塔である。さらに石塔1と石塔3はともに「上人」の墓であることから、記録はないものの、この時期の西行寺には高僧がおり、寺院としての中興期だったのではないかと推測される。

また、石塔7は地蔵講、石塔2は庚申講といった民間信仰の石塔である。地蔵講は地蔵菩薩の功德をたたえて営まれる法会であり、庚申講は60日ごとに巡ってくる庚申の晩に身をきよめて徹夜で過ごすことである。これらの民間信仰は地域の安穏や自己の無病息災等を願って行われることが多く、何らかの目的達成を記念して石塔が建立された。石塔の建立は経済的な負担も大きかったが、造塔により多くの功德が得られるとともに、信仰の証を永続的に残すことができると考えられていた。

さらに、延宝4年(1676)には忍藩主阿部正能家臣と忍領内氏子により前玉神社の石鳥居が建立された。元禄10年(1697)には万葉歌を刻む石灯籠が埼玉村の氏子一同により前玉神社に奉納されている。これら前玉神社に残る石造物は石塔群1とほぼ同時期のものであり、埼玉古墳群

表1 石塔群1(丸墓山古墳西側)

銘文( )内の文字は推測

No.	形状	種別	石質	種子	年号	西暦	銘文	寸法(最大高×最大幅×最大奥行)cm	備考
1	笠付方形	墓標	安山岩	大日(胎藏界)	延宝元年	1673	梵字(アーンク) 延宝元癸丑天/岸海上人/七月二日	笠(25×63×59) 方形(110×36×36) 反花座(12×58)	宝珠を欠失、笠には破風を表現、像容は胎藏界大日如来坐像、法界定印、方形の側面に蓮花
2	尖頂舟形	庚申塔	安山岩	大日(金剛界)	寛文7年	1667	(塔身)寛文七丁未年/梵字(バン、ウーン、タラク、キリーク、アク)/九月十八日 (基礎)(就)口(祝)前也/池田由左衛門/金沢忠口/(間)口徳口/池(尼)(君)右衛門/今井傳右衛門/野口市口右衛門/[ ]	130×55×33	梵字種子とともに金剛界四仏を梵字で刻む、塔身には三猿と二鶏を像容で陽刻
3	笠付方形	墓標	安山岩	大日(胎藏界)	天和3年	1683	梵字(アーンク) 天和三癸亥曆/権大僧都尊海上人/二月二十六日	方形92×36×31	宝珠・笠を欠失、棹に「孝第」「典能」、像容は胎藏界大日如来坐像、法界定印、方形の側面に蓮花
4	尖頂舟形	墓標	安山岩		宝永5年	1708	権僧都林(悦)万海/宝永五(戊)(子)天正月四日	99×42×20	尖頂に破風の表現あり、像容は胎藏界大日如来坐像、法界定印
5	舟形仏像	墓標	安山岩	大日(胎藏界)	天和3年	1683	梵字(ア) 天和三(癸)(亥)年/道清/八月十八日	52×36×24	
6	尖頂舟形	墓標	安山岩	大日(胎藏界)	元禄7年	1694	梵字(ア) 元禄七甲戌 施主/林海行人 口口/六月廿九日 敬白	63×32×22	
7	舟形仏像		安山岩	地藏	明暦3年	1657	梵字(ラ) 夫地藏菩薩者聞錫杖聲速得[ ]/明暦三天/正月廿四日/奉造宮當口口六道四生出離生死則[ ]	150×50×40	像容は地藏菩薩立像、錫杖は杖部分が欠失

表2 石塔群2(丸墓山古墳南側)

No.	形状	種別	石質	種子	年号	西暦	銘文	寸法(最大高×最大幅×最大奥行)cm	備考
8	尖頂舟形	墓標	安山岩		貞享元年	1684	婦真 十二月十四日/劍空道智信士靈位/貞享元甲子天	70×28×15	
9	無縫塔	墓標	安山岩					△27×18×18	無銘、塔身下半部欠失
10	無縫塔	墓標	安山岩				當山十三世亮岩周察覚口塔	40×19×17	塔身のみ
11	尖頂舟形	墓標	安山岩	大日(胎藏界)	寛文元年	1661	梵字(ア) 寛文元年/林有法師/辛丑八月十八日	55×27×15	棹に「若子[ ]」「施主宗覚」
12	駒形	馬頭観音	砂岩		明治27年	1894	明治廿七年旧五月八日/馬頭観世音/大字若小玉/願主 金子金吉	73×22×9	

表3 石塔群3(愛宕山古墳墳丘)

銘文( )内の文字は推測

No.	形状	種別	石質	種子	年号	西暦	銘文	寸法(最大高×最大幅×最大奥行)cm	備考
13	舟形仏像	墓標	安山岩		延宝4年	1676	婦真 宗林禪定門 靈/延宝四年丙辰九月九日	50×28×16	像容は地藏菩薩立像
14	双尖頂舟形	墓標	安山岩		延宝2年	1674	婦真 延宝(二)甲(寅)年/法圓靈/六月十八日	42×33×14	2名、棹に「施主」「白石口兵衛」
					貞享元年	1684	婦真 貞享元甲子年/妙智 靈/八月十九日		
15	舟形仏像	墓標	安山岩		寛文年間	1661 ~ 1673	(上)空宗圓禪定門靈位 寛文[ ]年/口月十八日/寂/[ ]禪定[ ]/三月[ ]	89×32×26	像容は阿弥陀如来立像、来迎印

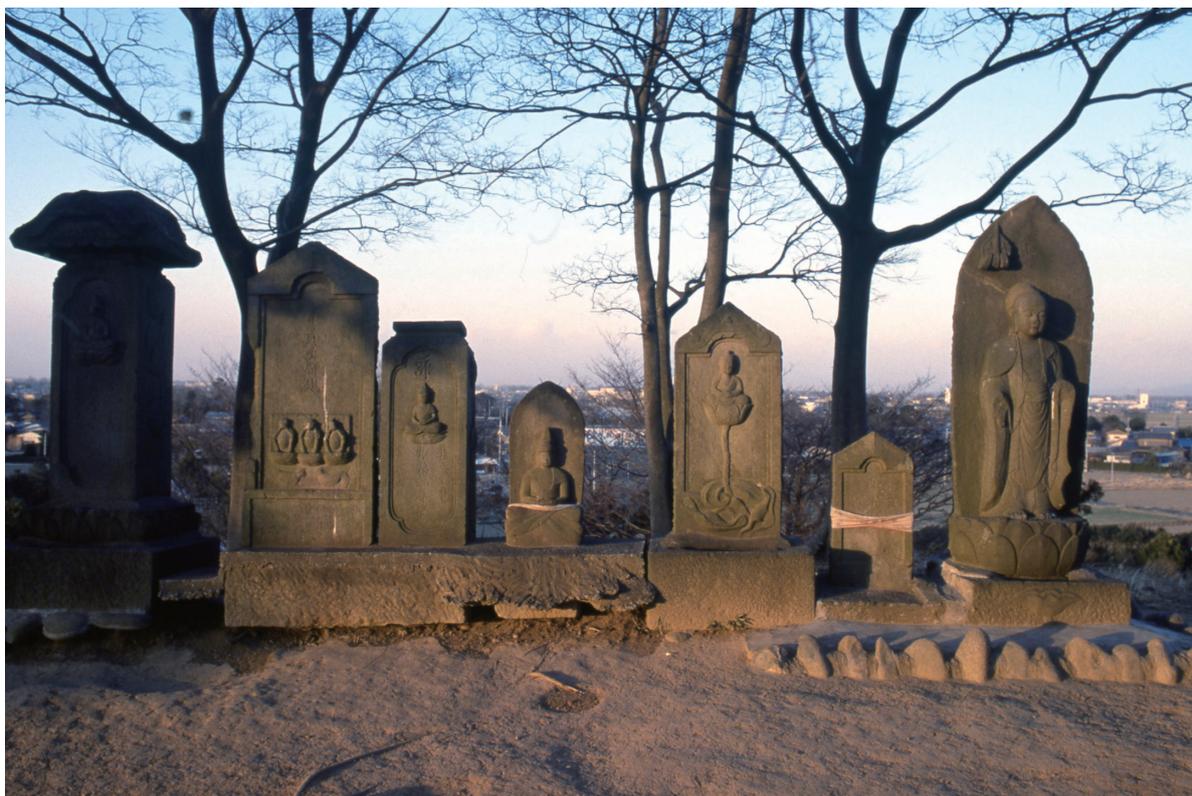


写真1 丸墓山古墳頂上に立つ石塔(昭和60年)



写真2 石塔群1全景(写真手前から石塔1～7)



写真3 石塔1～4



写真4 石塔5～7



写真5 石塔1



写真6 石塔1側面



写真7 石塔2



写真8 石塔3



写真9 石塔4



写真10 石塔5



写真11 石塔6



写真12 石塔7



写真13 石塔7側面



写真14 石塔1笠



写真15 石塔1像容



写真16 石塔1銘文



写真17 石塔2三猿・二鶏



写真18 石塔2銘文



写真19 石塔3像容



写真20 石塔3銘文



写真21 石塔4像容



写真22 石塔5像容



写真23 石塔4破風



写真24 石塔7銘文(一部)



写真25 現在地への移設工事(石塔群1)



写真26 石塔群2全景(右側から石塔8~12)



写真27 石塔8



写真28 石塔9・10



写真29 石塔11



写真30 石塔12



写真31 石塔群3全景(左側から石塔13~15)



写真32 石塔13



写真33 石塔14



写真34 石塔15

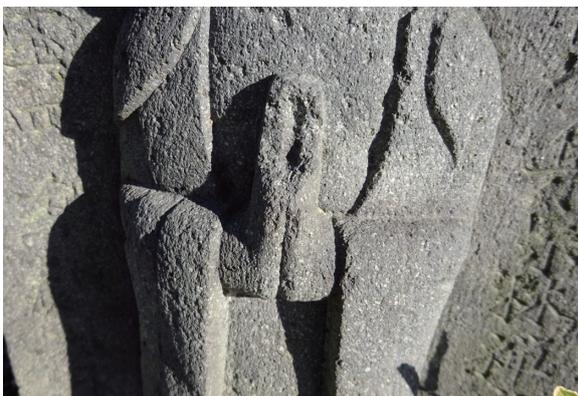


写真35 石塔13像容(手元)

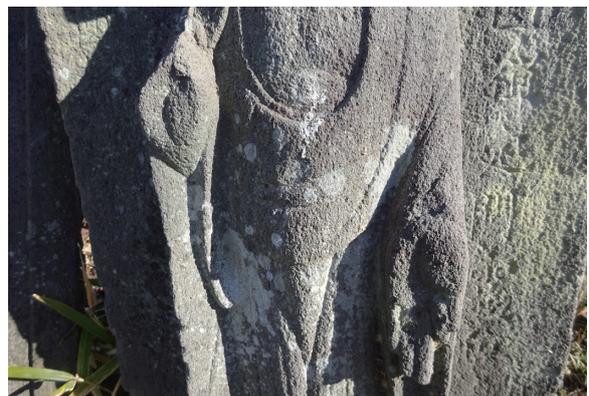


写真36 石塔15像容(手元)



写真37 石塔群3  
(横から)



写真38 石塔群3(背面)



写真39 石塔群3遠景

周辺ではこの時期に集中して石塔の造立が行われている。

17世紀代は新たな土地の開拓を目指し、低湿地の開発に重点が置かれた時代であった。そして17世紀半ばには各村で新規に水路が造られたことにより、低湿地に田野が広がる村の景観がつくられたとされる。また、江戸時代の村の人々にとって生活や生産に結び付く、人生儀礼や祭礼を行う場と寺社等は欠かせない存在であったと考えられている(行田市史 2016)。埼玉村の人々は、新たに農地を開拓し、生産性の向上に挑む生活の中で、安穏な世の中や無病息災に過ごすことを願いながら、石塔の造立を行ったことが伺われる。そして、その拠り所の一つとして西行寺があったのではないかと推察される。

本稿では埼玉古墳群に残された歴史資料のひとつとして、石塔を取り上げた。しかし、筆者の力不足により、石塔に記された銘文解読・解釈が不十分なことは否めず、また時代背景も含めた検証を十分に詰めることができなかった。今後の課題としたい。なお、銘文解読にあたり加藤光男氏の御教示を賜った。ここに明記し、深謝の意を表したい。

#### 参考文献

『新編武蔵風土記稿』

『増補忍名所図會』

埼玉県 1955 「埼玉郡 埼玉村」『武蔵国郡村誌』第十三卷

行田市史編纂委員会 1964 『行田市史』 行田市役所

埼玉県教育委員会 1983 『埼玉古墳群発掘調査報告書 第六集 丸墓山古墳 埼玉1～7号墳 將軍山古墳』

田中正夫 1984 「史跡埼玉古墳群保存修理事業報告―丸墓山古墳保存修理事業の報告―」『研究紀要報告』第2号 埼玉県立さきたま資料館

行田市郷土博物館 1999 『忍藩主阿部家―藩政と遺宝―』

三田村佳子 2000 「北埼玉の地藏祭り」『調査研究報告』第13号 埼玉県立さきたま資料館

池上 悟 2014 「調査報告 熊谷市集福寺所在の吉田家墓所」『熊谷市史研究第6号』熊谷市教育委員会

立正大学博物館 2015 立正大学博物館第9回特別展『近世の墓石と墓誌を探る』

行田市史編さん室・行田市教育委員会 2016 『行田市史 普及版 行田市の歴史』

池上 悟 2016 「熊谷市能護寺の歴代住持墓」『熊谷市史研究第8号』熊谷市教育委員会

埼玉県教育委員会 2018 『史跡埼玉古墳群総括報告書 I』